

額田王

群馬県立女子大学名誉教授 北川和秀

A 天皇、有司に命せて壇場を設けて、飛鳥淨御原宮に即帝位す。正妃を立てて皇后とす。后、草壁皇子尊を生れます。先に皇后の姉大田皇后を納して妃とす。大来ひめ女と大津皇子とを生れませり。……天皇、初め鏡王の女額田姫王を娶して、十市皇后を生しませり。（日本書紀 天武二・一・二七）

B 王子は、淡海帝の孫、大友太子の長子なり。母は淨御原帝の長女十市内親王。……高市皇子薨りて後に、皇太后王公卿士を禁中に引きて、日嗣を立てむことを謀らす。時に群臣各私好を挾みて、衆議紛紜なり。王子進みて奏して曰く、「我が國家の法と為る、神代より以来、子孫相承けて、天位を襲げり。若し兄弟相及ばば則ち乱此より興らむ。仰ぎて天心を論らふに、誰か能く敢へて測らむ。然すがに人事を以ちて押さば、聖嗣自然に定まれり。此の外に誰か敢へて間然せむや」といふ。弓削皇子座に在り、言ふこと有らまく欲ります。王子叱び、乃ち止みぬ。皇太后其の一言の國を定めしことを嘉みしたまふ。特闊して正四位を授け、式部卿に挙げたまふ。時に年三十七。

(懷風藻 葛野王)

舒明
——
中大兄皇子
(天智)
——
大友皇子鷦野皇女
(持統)

皇極・齊明

間人皇女

```

graph TD
    EM[Emperor Monmu] --- N1[Nakata no Oe no Miya]
    EM --- N2[Naga no Oe no Miya]
    EM --- N3[Kuro no Oe no Miya]
    N1 --- S1[Shimura no Oe no Miya]
    N1 --- S2[Naishi no Oe no Miya]
    N2 --- S3[Kuro no Oe no Miya]
    N2 --- S4[Naishi no Oe no Miya]
    N3 --- S5[Shimura no Oe no Miya]
    N3 --- S6[Naishi no Oe no Miya]
    S1 --- S1_1[Naishi no Oe no Miya]
    S1 --- S1_2[Naishi no Oe no Miya]
    S2 --- S2_1[Naishi no Oe no Miya]
    S2 --- S2_2[Naishi no Oe no Miya]
    S3 --- S3_1[Naishi no Oe no Miya]
    S3 --- S3_2[Naishi no Oe no Miya]
    S4 --- S4_1[Naishi no Oe no Miya]
    S4 --- S4_2[Naishi no Oe no Miya]
    S5 --- S5_1[Naishi no Oe no Miya]
    S5 --- S5_2[Naishi no Oe no Miya]
    S6 --- S6_1[Naishi no Oe no Miya]
    S6 --- S6_2[Naishi no Oe no Miya]
  
```

鏡王 —— 額田王

十市皇后

額田王の歌

① 熟田津に船乗りせむと月待てば潮もかなひぬ今は漕ぎ出でな（一・八）

右、山上憶良大夫の類聚歌林を檢ふるに曰はく、飛鳥岡本宮御宇天皇の元年己丑、^{〔舒明〕}九年丁酉の十二月己巳の朔の壬午、^{〔十四日〕}天皇・大后、伊豫の湯の宮に幸す。後岡本宮馴宇天皇の七年辛酉の春正月丁酉の朔の壬寅、御船西に征きて、始めて海路に就く。庚戌、御船、伊豫の熟田津の石湯行宮に泊つ。天皇、昔日より猶し存れる物を御覽し、當時忽感愛の情を起す。所以に歌詠を製りて哀傷しひたまふといへり。即ち此の歌は天皇の御製そ。但し、額田王の歌は別に四首あり。

参考

a 御船西に征きて、始めて海路に就く。（日本書紀 齋明七・一・六）

b 御船、伊豫の熟田津の石湯行宮に泊つ。（同 齋明七・一・一四）

c 御船、還りて娜大津に至る。（同 齋明七・二・二五）

d 天皇、朝倉宮に崩りましぬ。（同 齋明七・七・二四）

e 皇太子の妃蘇我造媛、父の大臣、塩の為に斬らると聞きて、心を傷りて痛み惋ふ。
⋮⋮造媛、遂に心を傷るに因りて、死ぬるに致りぬ。皇太子、造媛徂逝と聞きて、
愴然傷怛みたまひて、哀泣みたまふこと極めて甚なり。是に、野中川原史満、進
みて歌を奉る。歌ひて曰はく、

山川に 鶯鶯二つ居て 偶よく 偶へる妹を 誰か率にけむ 〈其一〉

本毎に 花は咲けども 何とかも 愛し妹が また咲き出来ぬ 〈其二〉

皇太子、慨然頽歎き褒美めて曰はく、「善きかな、悲しきかな」といふ。乃ち御琴を授けて唱はしめたまふ。絹四四・布二十端・綿二一裏賜ふ。（同 大化五・三）

天皇、内大臣藤原朝臣に詔して、春山の万花の艷と秋山の千葉の彩とを競憐はしめたまふ時、額田王、歌を以ちて判る歌

② 冬ごもり 春さり来れば 鳴かざりし 鳥も来鳴きぬ 咲かざりし 花も咲けれど山を茂み 入りても取らず 草深み 取りても見ず 秋山の木の葉を見ては 黄葉をば取りてそしのふ 青きをば 置きてそ歎く そこし恨めし 秋山われは（一・一六）

額田王の近江国に下りし時作る歌、井戸王すなはち和ふる歌（井戸王の歌は省略）
③ 味酒 三輪の山 あをによし 奈良の山の山際にい隠るまで 道の隈 い積るまでに つばらにも 見つつ行かむを しばしばも 見放けむ山を 情なく 雲の隠さふべしや（一・一七）

反歌

④ 三輪山をしかも隠すか雲だにも情あらなも隠さふべしや（一八）

右二首の歌、山上憶良大夫の類聚歌林に曰はく、都を近江国に遷す時に三輪山を御覽す御歌そ。
日本書紀に曰はく、六年丙寅の春三月辛酉の朔の己卯、都を近江に遷すといへり。

〔参考〕

a 都を近江に遷す。是の時に、天下的百姓、都遷すことを願はずして、諷へ諫く者多し。童謡亦衆し。日日夜夜、失火の処多し。（日本書紀 天智六・三・一九）

b 皇太子即天皇位す。（同 天智七・正・三）

天皇、蒲生野に遊猟したまふ時、額田王の作る歌

⑤あかねさす紫野行き標野行き野守は見ずや君が袖振る（一・二〇）

皇太子の答へましし御歌 明日香宮に天の下知らしめし天皇、謐して天武天皇といふ

⑥紫草のにはへる妹を憎くあらば人妻ゆゑにわれ恋ひめやも（二一一）

紀に日はく、天皇七年丁卯、夏五月五日、蒲生野に従猟したまふ。時に大皇子・諸王・内臣と群臣、悉皆に従そといへり。

〔参考〕

a 天皇、蒲生野に縦猟したまふ。時に、大皇子・諸王・内臣及び群臣、皆悉に従につかに従なり。（日本書紀 天智七・五・五）

b 菴田野に縦猟す。（同 推古一九・五・五）

c 天皇、山科野に、縦猟したまふ。大皇子・藤原内大臣及び群臣、皆悉に従につかへまつる。（同 天智八・五・五）

額田王、近江天皇を思ひて作る歌一首

⑦君待つとわが恋ひをればわが屋戸のすだれ動かし秋の風吹く（四・四八八）

鏡王女の作る歌一首

⑧風をだに恋ふるは羨し風をだに来むとし待たば何か嘆かむ（四八九）

〔参考〕

中大兄 近江宮に天の下知らしめし天皇の三山の歌（反歌は省略）

a 香具山は 畠火ををしと 耳梨と 相あらそひき 神代より 斯くにあるらし

も 然にあれこそ うつせみも 嫁を あらそふらしき（一・一三）

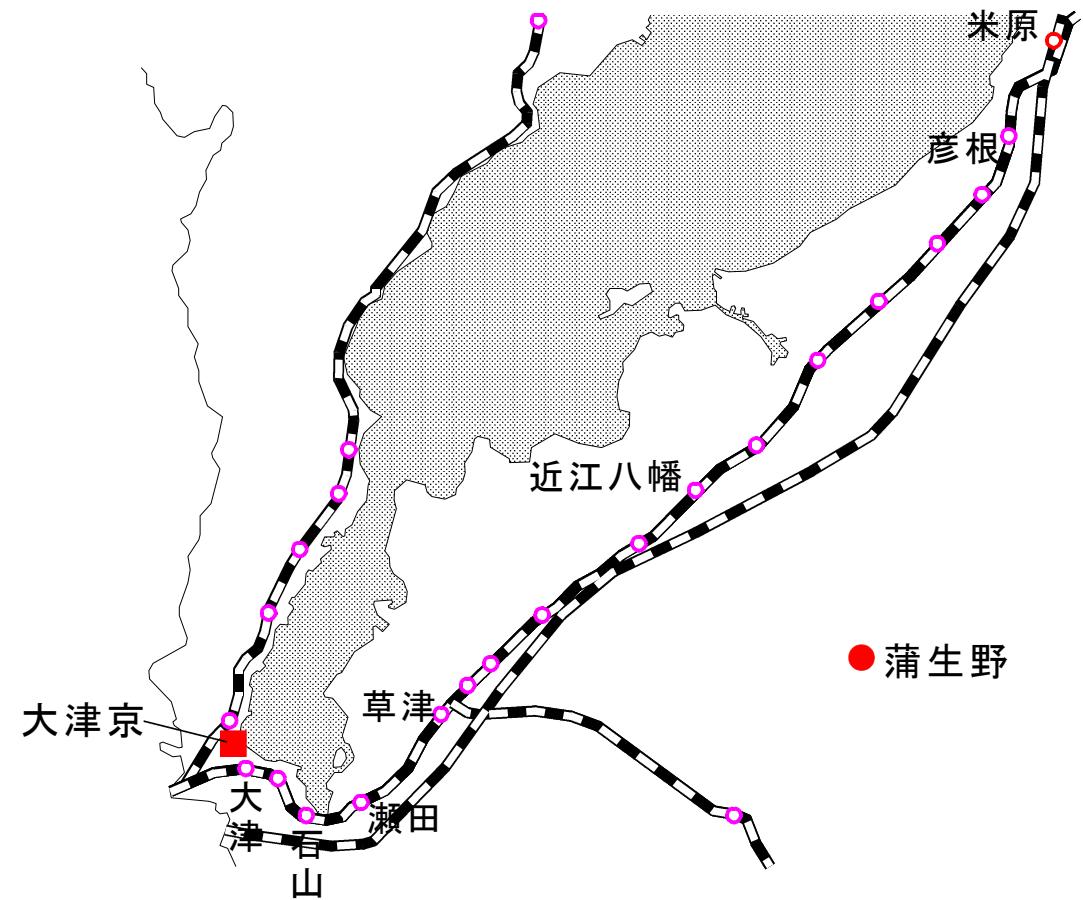
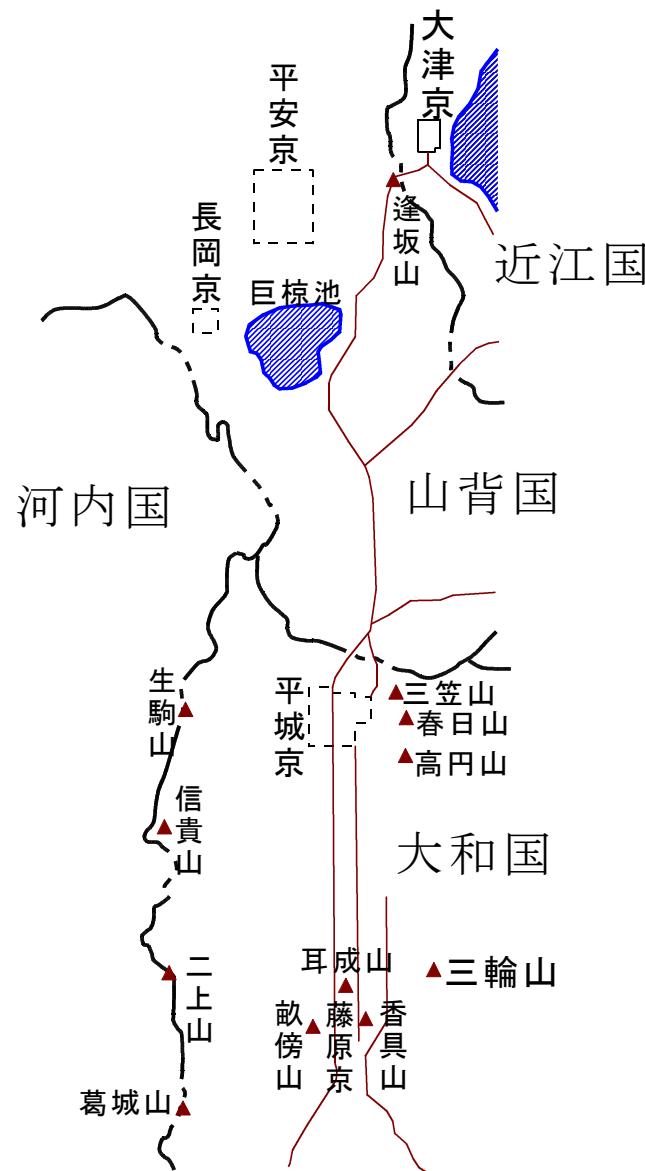
古昔

天皇の大殯の時の歌二首（そのうちの一首）

吉野の宮に幸しし時、弓削皇子、額田王に贈与る歌一首
⑨かからむの懷知りせば大御船泊てし泊りに標結はましを 額田王（二一・一五一）

⑩古に恋ふる鳥かも弓絃葉の御井の上より鳴き渡り行く（二一・一五一）

額田王、和へ奉る歌一首 大和の都より奉り入る
⑪古に恋ふらむ鳥は霍公鳥けだしや鳴きしわが念へる如（二一二）



額田王關係年表

七〇五	七〇四	七〇三	七〇二	七〇一	六九〇	六九八	六九七	六九六	六九五	六九四	六九三	六九二	六九一	六八〇	六八九	六八八	六八七	六八六	六八五	六八四	六八三	六八二	六八一	六八〇	六七八	六七九	六七七	六七六	六七五	六七四	六七三	六七二	六七一	六七〇	六六九	六六八	六六七	六六六	六六五		
慶雲	大宝	文武	一〇		持統	朱鳥																												天智							
二元	三	二元	四	三	二元	〇	九	八	七	六	五四	三	二元	元	四	三	二	一〇	九	八	七	六	五四	三	二元	〇	九	八	七	六	五四	三									
乙巳	甲辰	癸卯	壬寅	辛丑	庚子	己亥	戊戌	丁酉	丙申	乙未	甲午	癸巳	壬辰	辛卯	庚寅	己丑	戊子	丁亥	丙戌	乙酉	甲申	癸未	壬午	辛巳	庚辰	己卯	戊寅	丁丑	丙子	乙亥	甲戌	癸酉	壬申	辛未	庚午	己巳	戊辰	丁卯	丙寅	乙丑	甲子
		文武			持統																												天武			天智					
麻呂上			比島	多治		皇子	高市																											中兄							
葛野王没、 37歳		大宝律令を施行	弓削皇子没	高市皇子没	藤原宮に遷都		草壁皇子没		天武天皇没					草壁皇子立太子		十市皇女没		十市皇女、伊勢神宮に参赴		天智天皇没		壬申の乱。淨御原宮に遷都		藤原鎌足没。葛野王生		蒲生野に遊獵		近江大津宮に遷都		間人大后没											
37	36	35	34	33	32	31	30	29	28	27	26	25	24	23	22	21	20	19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1					
69	68	67	66	65	64	63	62	61	60	59	58	57	56	55	54	53	52	51	50	49	48	47	46	45	44	43	42	41	40	39	38	37	36	35	34	33	32	31	30	29	28

*額田王の万葉集における最も新しい歌は、

持統朝の弓削皇子との贈答歌